

日本の『史記』受容

— 鎌倉・室町，江戸時代 —

藤 田 勝 久

は じ め に

私は、先に日本の『史記』研究の一部を概観した〔文献7，8〕。ここでは、鎌倉・室町，江戸時代の『史記』受容について述べてみたい。

これまで鎌倉・室町，江戸時代の日中交流の歴史は、森克己『日宋貿易の研究』（1948年，『森克己著作選集』1，国書刊行会，1975年），同『続日宋貿易の研究』（『著作選集』2，1975年），同『続々日宋貿易の研究』（『著作選集』3，1975年），同『日宋文化交流の諸問題』（1950年，『著作選集』4，1975年），佐久間重男「中世 宋元明時代の日中文化交流」（大庭脩・王曉秋編『日中文化交流史叢書1 歴史』大修館書店，1995年）などに概観がみえる。

また，この時期の漢籍輸入は，森克己「日唐・日宋交通に於ける史書の輸入」（史学会編『本邦史学史論争』上巻，富山房，1939年），大庭脩「日本における中国典籍の伝播と影響」（『日中文化交流史叢書9 典籍』1996年），同「江戸時代の中国典籍交流」（同書，1996年）が基本的な概略を示し，大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎出版，1984年），同『漢籍輸入の文化史』（研文出版，1997年）に詳しい考察がある。

中国における『史記』の受容は，内藤湖南『支那史学史』（1949年，平凡社東洋文庫，1992年復刊）に記述があり，版本の種類と特徴は，尾崎康『正史宋元版の研究』（汲古書院，1989年）にみえている。

本稿では，これらの成果によりながら，日本の『史記』受容の概略と，その

特徴を考えてみよう。なお主要参考文献は、基本的な研究と、この時代に関する著書にとどめ、その他については先の論文を参照していただければ幸いである。

1 鎌倉・室町時代の漢籍輸入

宋・元時代の日本と中国

『史記』の受容を考えるまえに、その時代背景を確認しておこう。遣唐使が894年に廃止される頃、9世紀初から新羅商船が来航し、9世紀中頃には唐の商船が来航するようになった。平安時代に唐商船の来航が盛んになると、日本は10世紀初に来航の制限を設けたが、天台・五台山巡礼をする僧侶たちの渡航を許している。そのとき中国では、唐王朝が907年に滅び、927年には契丹が渤海を滅ぼし、渤海国使の日本への来朝も途絶えた。しかし五代十国の時代をへて、北宋の王朝（960～1126）が建国されると、また民間の日宋交通もしだいに発展していった。

宋王朝は、広州・明州・杭州・泉州などの貿易港に「市舶司」をおいて交易を管理し、宋船は日本の博多湾に入り太宰府に報告した。宋商船の交易品は、絹織物・陶磁器・香料・薬品・茶などで、このとき銅銭・書籍も入っている。11世紀になると、太宰府の貿易管理のほか、九州荘園内の港津で密貿易が行なわれたという。一方、日本からの商船は、11世紀後半期には航海技術の制約から高麗を経て渡航したが、12世紀には高麗の治安不安と航海術の進歩によって宋へ直接渡航した。この北宋時代・平安末期の旅行記に、成尋（1011～81）の『参天台五台山記』8巻がある。

北宋が金に華北を占領され、1126年に都・開封を攻略されて滅ぶと、南宋王朝（1127～1276）が建国され、やがて杭州の臨安府を首都とした。12世紀後半期には、南宋は積極的に貿易を行い、当時の日本は平清盛（1118～1181）の全盛期で、宋商船を博多から神戸へ誘致した。その後、1192年に鎌倉時代となっても、幕府は対外貿易の管理を引き継ぎ、当初は自由貿易であった。このとき

南宋では、民間に印刷術が普及して、多くの宋版本を輸出している。なお中国の河川・湖水の運航では、これまで山東・江蘇省から隋・唐・宋代の木造船や、河北省の元代運送船、山東省の明代木造船が発見されているが、1973年には福建省泉州湾で南宋の海洋船（長さ24.2m×幅9.15m）の構造が明らかとなっている（中国社会科学院考古研究所編、関野雄監訳『新中国の考古学』平凡社、1988年）。

13世紀初に興起したモンゴルは、金を滅ぼし、1260年にフビライが即位したあと、都を燕京（大都）に定め、国号を元と改めた。そして1266年から6回にわたって日本に使者を派遣し、朝貢を強要したが拒否され、1274年に元・高麗の軍が日本に來攻した（文永の役）。また日本商船も、南宋がモンゴルに圧迫されていると知り、1279年には南宋が滅亡した。その後、ふたたび1281年に元・高麗の軍が日本に來攻した（弘安の役）が、13世紀末には日元貿易が復活して盛んとなり民間貿易は続けられていた。そして日本では、社寺が「造営料唐船」を仕立てて貿易をし、幕府の公許船となった。やがて元王朝は1368年に滅んで明王朝が建国され、これが南北朝時代（1331～1392）をへた室町幕府の日明貿易の時代となる。

宋・元時代の漢籍輸入

唐代では、劉知幾『史通』が『史記』の再評価をし、唐代後半には古文復興の運動がおこって『史記』『漢書』が文章の模範となった。『史記』の注釈書は、南朝宋の裴駰の集解に加えて、唐の司馬貞の索隱、唐の張守節の正義が作られ、『漢書』にも顔師固の注が作られた。さらに北宋では、卷子本に変わって、經書をはじめ正史の木版印刷が行われた。三史は、北宋・淳化5年（994）に杭州で開版が始まり、景祐元年（1034）までに校訂が行われた。だから真宗の大中祥符年中（1008～1016）に、高麗の要請で九經とともに『史記』、兩漢書、『三国志』、諸子などを下賜したのは、版本の刊行とほぼ同じ時期に史書が海外に出された例である。また景祐2年（1035）には、『史記』集解本が刊刻され、南宋・乾道7年（1171）には、『史記』集解・索隱二注本が刊刻された。さら

に南宋の紹熙末（1194）慶元初刊といわれる黄善夫本『史記』の三家注合刻本が刊行された。このほか元代では、至元25年（1288）に『史記』彭寅翁本が刊行されている。

このような情勢で日本への漢籍輸入は、僧侶のもたらした經典などのほか、中国商人の民間貿易により「新渡唐本」として喜ばれたという。平安末期に藤原道長は宋商人から『文選』『白氏文集』の摺本を入手し、また藤原頼長は『礼記正義』『周易正義』『周礼疏』の摺本を所有の書写本と交換しようとした（『台記』康治2年11月，1143，久安2年3月，1146）。これらは経書や文集であるが、当時の版本輸入の情勢を伝えている。さらに頼長とほぼ同時期の藤原通憲（～1159）の「通憲入道蔵書目録」には、経書や『説文解字』について史書の蔵書がみえる。

一合，十三櫃。史記索隱上帙七弓，同中帙十卷，同下帙九卷，古文考九卷，馬史発題一卷，決疑滯一部一帖

一合，第十四櫃。漢書伝一帙十弓，同二帙十弓，同三帙十一弓，同帝記十三弓

一合，第十五櫃。漢書伝第四帙十一弓，同五帙十弓，同六帙十弓，同七帙八弓

一合，第十六櫃。魏呉蜀志廿帖，漢書集義一部，同伝七帙五卷，同問答三卷，同志上帙六弓，五行志七卷，地理志下之上弓，後漢書私記一弓，新注漢書叙例一卷，漢書訓纂四卷

一合，第廿一櫃。蘇子由史記列伝廿帖

一合，第百九櫃。一結抱朴子上帙，一結史記世家上帙十弓，一結本紀十二弓，……一弓匡張孔馬伝第五十一，漢書八十八，後漢書帝記十弓，漢書六帙

これらの書籍は、おおむね帙入り本を巻数で数えている。ここでも『史記』より『漢書』に関する書物のほうが多く、当時の関心のあり方がわかり興味深い。また大庭脩氏によれば、宋代では『太平御覧』の国外輸出を禁止していたが、日本には『太平御覧』が舶載され、平清盛も摺本300巻を献上したことに

注目されている（『山槐記』治承3年12月，1179）。このように宋・元時代の漢籍輸入の記録は少ないが，その版本は日本に多く輸入され，『史記』『漢書』についても一部が伝えられている。

2 鎌倉・室町時代の学問と古鈔本

博士家の説

平安時代から鎌倉時代にかけて，学問のあり方と漢籍の読法に変化があるといわれる。森克己氏は，これまで貴族たちが中国の史書を愛読したのは，歴代の興亡史を学び理解しようとしたのではなく，儒教的「勸善懲惡」の実例を求めるか，あるいは史書に用いられた美辞麗句を採って詩文に生かすという表面的な目的にすぎないとする。また朝廷の大学の制度は，經史を讀習させ，史書は朝議の案文を起草するために学ばれたが，その学問は大江・清原・菅原氏と一部の藤原氏らの世襲となった。そのため宋の版本が盛んに輸入される情勢とは反対に，かえって中国史書への関心が薄くなったとする。その著名な例は，『江談抄』の記述である。

『江談抄』は，大江匡房（1041～1111）の言談を，藤原実兼（1085～1112）が筆録したもので，その目的の一つは，大江家の史書・經書など秘説の学統の存続を心配して言談をしたという。その第六「三史文選師説漸絶事」には，博士家の師説が衰退してゆく様子を述べている。

三史・文選，師説漸絶。詞華翰藻，人以不重之句。菅宣義見之云。文道宗匠足下一人歟。宣義カ無ラム時。可被書之句也ト云。匡衡答云。足下達令生レハ巨曾漸トハ書ト云々。

このように平安末には，博士家の説が衰え，中国の歴史にかわって国史に対する関心がたかまったという。しかし実際には，それ以降から鎌倉・室町時代にかけて，已然として天皇と貴族たちによる『史記』をはじめとする漢籍の講読があり，博士家の説と訓点の教示が続いていたとおもわれる。

天皇と貴族の読書

平安時代について鎌倉・室町時代でも、天皇の読書と御湯殿始^{ゆどのはじめ}の儀式が行われている。いま『日本漢学年表』（大修館書店、1977年）や諸記録などによって、鎌倉時代の事例を年代順にいくつか列举してみよう。

- ・1205年1月、天皇が侍読の菅原為長から『史記』五帝本紀を受ける（『菅儒侍読年譜』元久2年）
- ・1227年8月、藤原頼資が経光に『史記』孝文本紀を授ける（『民経記』安貞元年）
- ・1229年11月、藤原定家が定修に『史記』留侯世家を授ける（『名月記』寛喜元年）
- ・1238年2月、菅原為長が『史記』孝文本紀を進講（『菅儒侍読年譜』暦仁元年）
- ・1242年7月、菅原為長が『史記』五帝本紀を進講（『菅儒侍読年譜』仁治3年）
- ・1244年1月、御読書始に、藤原経範が『史記』を侍読（『妙槐記』寛元2年）
- ・1247年9月、藤原兼経の邸で作文会、『史記』夏本紀を講じ詠史詩（『葉黄記』宝治元年）
- ・1251年8月、小童（幼少の天皇）が「五帝本紀」を読む（『続日本後記』後深草天皇・建長3年）
- ・1286年4月、蔵人の藤原兼仲が御書所で『史記』を進講（『勘仲記』弘安9年）
- ・1287年11月、菅原在嗣が『史記』を、菅原在兼が『漢書』を、菅原兼倫が『後漢書』を進講（『伏見院御記』弘安10年）
- ・1310年10月、天皇が『史記』孝文本紀を読み、藤原具範が侍読（『花園院御記』延慶3年）
- ・1311年2月、菅原在輔が『史記』五帝本紀を侍読、5月、藤原種範が『史記』孝文本紀を侍読、6月、天皇が菅原在兼の説により『史記』秦始皇

皇本紀を読書（『花園院御記』 応長元年）

- ・1317年3月、藤原公時が『史記』孔子世家を進講（『花園院御記』 文保元年）
- ・1318年3月、菅原在兼が侍読となり『史記』五帝本紀を進講（『菅儒侍読年譜』 文保2年）

これをみると天皇の読書は、菅原・藤原氏が交互に進講し、おおむね『史記』五帝・孝文本紀などが多く、まれに秦始皇本紀・孔子世家がある。また貴族の間でも『史記』の講読があり、このような受容は室町時代までつづいている。

武家・僧侶の学問と『史記』古鈔本

鎌倉・室町時代に興ったのは、僧侶たちによる学問である。この時期には、北条実時が武蔵国金沢村に金沢文庫を創設し、ここには全国から学僧が集まったという。室町初期には、足利氏一門によって下野国足利荘に、漢学研修のための施設として足利学校が建てられた。のちに上杉憲実が鎌倉から快元和尚を招いて、宋版の經典を寄進した。これらの蔵書から、この時代までの漢籍の状況を知ることができる。ただし、このように武家が開設した文庫・学校も、その教育や運営には僧侶があたっていたといわれ、それを反映して五山僧侶による『史記』の注釈・解釈〔漢文体、口語体〕が現れた。

また鎌倉・室町時代には、入元・入明僧の持ち帰る書物が外典にまで拡大したが、なお一方で書写された『史記』古鈔本が現在まで残されている。そのなかに、年代は不明であるが、平安時代の古鈔本につづく『史記』の写本があり貴重な資料となる。

たとえば宮内庁書陵部には、（1）五帝本紀第一（清原家点本1軸）、（2）高祖本紀第八、（3）范睢蔡沢列伝第十九の3種の古鈔本が所蔵されている。また愛知県猿投神社^{さなげ}には、旧抄卷子本の『史記』があり、鎌倉時代の抄写といわれる。それは、①呉太伯世家第一、②魯周公世家第三、③燕召公世家第四、④管蔡世家第五、⑤陳杞世家第六、⑥衛康叔世家第七、⑦宋微子世家第八、⑧楚世家第十の八巻である。この猿投神社蔵の古鈔本は、水澤利忠『史記会注考

証校補』巻九に影印と解説があり、その概略をうかがうことができる。

その一つとして、猿投本の「燕召公世家第四」をみておこう。この巻は、冒頭の一部が欠けているが、「在祖乙時。則有若巫賢」の部分から巻末までが残存する。注釈は集解だけで、索隱・正義の注はない。その表記方法は、漢代の竹簡や唐代の写本とちがい、基本的に繰り返し記号を文字化し、「廿」「卅」は「二十」「三十」などになっている。

また猿投本と『史記』南化本（カッコ内）を比較すると、本文では「率（卒）」「殺（弑）」「圖（國）」「闕（關）」などの相違があり、注釈では「世本（系本）」「世家（系家）」の表記が異なる。そのほか若干の字句に相違があるが、構文全体では、内容にかかわる大きな違いはみられない。

3 『史記抄』の出現と南化本

このように鎌倉・室町時代では、『史記』の写本を入手した時期から、しだいに宋・元時代の『史記』版本が輸入され、一部に版本を参照しながら、抄写本を利用するようになっていく。このような『史記』テキストの変化をうけて、この時期には日本で初めての『史記』の注釈が残っている。水澤利忠『史記会注考証校補』八、「史記之文献学的研究」第三章「史記抄」などによれば、その概略は以下の通りである。

英房史記抄

藤原英房は、南北朝時代の人で、藤原家・大学頭の家系である。『英房史記抄』は、龍谷大学図書館の所蔵のテキストがあり、その内容は正平2年（1347）、英房が55才頃の抄写ではないかという。

第一冊の首に「史記抄出」とあり、『史記』の予備知識を記した解説があり、当時の史記学の一面を伝えるという。第二冊は、殷本紀から項羽本紀まで、第三冊は礼書から平準書までの八書で、今日では『史記』項羽本紀までと八書の部分が残存する。

本紀の前半は、ほとんど『史記』の全文をあげ、必要な所に三家注を要約して付け、宋儒など他書の注釈を参照する。このほか博士家の旧説（師説）を多く引き、50ヶ条に及ぶ「私案」「私云」「案」で、文字の異同や独自の解釈を述べる。本紀の後半から八書は、正文を省略し、三家注を要約する。また八書では、他書からの引用がほとんど無く、「師説」・英房の説も皆無という。したがって本書の性格は、『史記』講読の中心とおもわれる部分を抄写し、その注解を抜粋して模写し、そこに旧説や自説を付して成立したものである。またここでは「師説」のほか、他の注釈・解釈を参照するようになったことが注意されている。

『英房史記抄』のテキストは、日本の『史記』古鈔本と同じ系統の写本で、三家注合刻本（おそらく彭寅翁本）から注解を抄録したものと推測されている。

桃源史記抄

つぎに注目されるのは、室町時代の『史記桃源抄』である。瑞仙、号は桃源（1430～1489）の『史記抄』は古くから有名であり、大島利一「桃源瑞仙の史記抄を読む」（『東方学報』10-1, 1939）が、その経過と性格を考察している。

それによると桃源瑞仙は、20歳の頃、竺雲等連（漢書家・大岳周崇の嗣）に『漢書』を学び、瑞溪周鳳に蘇東坡の詩を学んだ。康正・長禄（1455～1459）の頃、京都南禅寺の慈氏院で牧中天岩に『史記』の講義を受けた。その講義を聴いて筆記したものが、のちに『史記抄』の重要な要素となっている。この時は青年学僧であった。のち38歳の時、応仁の乱を避けて近江の永源寺に行き、『史記』や東坡詩などを弟子に講説し、『史記』を抄写した。そして文明13・14年ころ京都に帰り、『漢書』の講義をしたが、文明18年、57歳のとき相国寺の八十世となった。

『史記抄』には、桃源が48歳であった文明9年（1477）の識語が数カ所に記されており、このころ補抄完成されたとする。またその完成には、弟子の季玉の協力があつた。

この『史記桃源抄』は、江戸時代の近藤正斎『右文故事』巻之一に、寛永3

年（1626）に木活字本が刊行された経過を記すように著名であったが、今日では極めて入手しにくくなっている。大島氏は、三ヶ尻浩編『史記抄』瑞仙桃源抄（謄写版本，1937，38年）と、自らの見聞によって、以下の伝本をあげている。

①自筆写本（元東京帝国大学図書館蔵，大正12年に関東大震災で焼失）

②岩崎文庫蔵写本

③寛永版本（近衛公爵家本・京都大学図書館寄託，新村出氏家本，京都府立図書館本等）

④足利学校遺蹟図書館所蔵の12冊本（第12冊に足利学校・閑室和尚「三要自筆」の記載）

⑤京都府立図書館所蔵の14冊本

ただし水澤利忠氏は，①の自筆本をのぞき，あらたに自筆本系統の1舟橋家旧蔵京都大学図書館蔵本，2米沢図書館旧蔵東洋文庫蔵本，3米沢市立図書館蔵本，4足利学校遺蹟図書館蔵本，5寛永古活字本，6三ヶ尻油印本と，省略本系統の7内閣文庫本，8京都府立図書館蔵本に分類している。その後，亀井孝・水澤利忠『史記桃源抄の研究』本文編1～5（日本学術振興会，1965，1967，1970～73）が刊行された。

『史記抄』19巻は，首に史記源流，集解序，補史記序，索隱序，正義序，三皇本紀がある。以下は『史記』130巻の全部ではなく，五帝本紀～孝武本紀までの12本紀と，伯夷列伝～太史公自序の70列伝は全部あるが，十表と八書が無く，世家は呉太伯世家第一のみである。このうち牧中の講義を受けたのは，序と補史の三皇本紀から周本紀・武王条までと，司馬相如列伝の途中までで，扁鵲倉公列伝は牧中の講義を受けたが桃源は抄録せず，あとで季玉と補ったという。そのほかは桃源の書き下ろしである。

ところで『史記抄』のテキストについて，近藤正斎『正斎書籍考』巻三は，老子莊子を伯夷列伝の前に置くことから，元・彭寅翁本すなわち開元本のよるとするが，大島氏は，牧中の講義を受けた部分（本紀・司馬相如列伝まで）と呉太伯世家を黄善夫本〔三家注合刻本〕とし，桃源の講義したテキストは元・

中統本〔集解・索隱本〕によると推測する。また水澤利忠氏も、牧中の講義を受けた部分は三家注合刻本で、桃源は三家注を見ていたが、テキストは元版の二注合刻本（集解、索隱）と想定している。

このような『史記桃源抄』は、平安時代の博士家の説（師説）と諸家の注を集大成しており、わが国で最初の国字解として、当時の言語資料としても貴重といわれる。この古本について大島氏は、呂后本紀・孝景本紀を対比して、平安時代の大江家国本と近い写本と考証する。そして「或本」「一本」という諸本を合わせて、桃源らが早くも古鈔本を用いて版本の文字校勘をした点に注目している。このほか（１）に、桃源は『左伝』『国語』『戦国策』『漢書』『資治通鑑』なども比較参照して、『史記』の史実を探求しており、ここに歴史的な理解を示すという。（２）に、太史公に敬服し、『史記』を尊重する態度から、大宛列伝を實際は張騫列伝とみなして、索隱の批判を弁護する点などを指摘する。

したがって『史記桃源抄』は、最初の国字解というだけでなく、従来の諸説を合わせ独自の考証をした点においても興味深い内容をふくんでいる。その考証は、さらに今後とも研究を深めるべきであろう。このほか『史記抄』には、『史記幻雲抄』があるが、これは『史記』南化本と一緒に見ておこう。

『史記』南化本の系譜

旧上杉氏所蔵『史記』南化本については、すでに水澤利忠「史記之文献学的研究」第三章「史記抄」が、『史記幻雲抄』との関連で説明しているが、近年に『国宝 史記』全12巻（汲古書院、1996～1998年）の写真版が刊行され、第12巻には尾崎康「黄善夫本史記について」、小沢賢二「南化本史記解説」の解題がある。その要点を紹介すれば、以下の通りである。

このテキストは、南宋中期に刊行された建安黄善夫本の『史記』90冊である。すでに室町時代には伝来し、幻雲が入手したあと、大量の書き入れを行なうために改装した。のち妙心寺の南化玄興（1538～1604）の手に渡り、そのため「南化本」とも呼ばれる。天正19年（1586）6月以降に、直江兼統

(1560～1619)に譲られ、さらに旧米沢藩主・上杉氏が所蔵し藩校に置いた。現在は国宝に指定され、国立歴史民俗博物館に所蔵されている。

『史記』南化本は、本文に朱句点・朱引があり、墨書で返点と送り・振り仮名などが書かれている。また三家注本の正義注のほかに、『正義』単注本から引用した書き入れがある。また南化本の書き入れから、注釈の系統がうかがえる。

『史記幻雲抄』の著者、寿桂(1460～1533)は、字を月舟、幻雲などという。幻雲は、「漢水余波序」で桃源の『漢書』の講義につねに出席したといい、桃源の『史記』『漢書』の学説を受けて成立したものといわれる。この幻雲と『史記』南化本との関係では、以下の二つに分けられる。

①幻雲所蔵より前に書き入れてあった注釈

②幻雲とその門下が新たに付加した資料

このうち①では、A英房がまとめた資料と、英房の史記説、B室町中期以降の大量の『史記正義』の佚文などがある。②は、『史記幻雲抄』にあたる部分であり、『史記』南化本欄外の標記中から抄出して成立したものである。したがって、ここには古本異字や、正義佚文、博士家の史記説がみえている。この『史記』南化本の資料的価値は、最も良い版本といわれる黄善夫本であるだけでなく、日本に伝えられた注釈・校訂が「書き入れ」として残されている点で、さらに重要な価値をもっている。

4 江戸時代の漢籍輸入

明代の中国と日本の外交は、日明勘合貿易の発展として知られている。それまで14世紀半～15世紀前半は前期倭寇の時代で、朝鮮・大陸北部に日本人が活動したが、1392年に李氏朝鮮が海防体制をしき、1368年に明王朝が成立すると海防体制を強化した。そして明王朝は、足利義満を日本王に封建し、勘合貿易を行っている。16世紀半から後期倭寇の時代には、東南沿海地方に中国人の私貿易があり、海禁の弛緩があった。

明末になると、中国と日本との関係は変化した。豊臣秀吉は、朝鮮に攻め入り（文禄の役、壬申倭乱、1592～96）、文禄の役の後に明・万暦帝から日本国王に封ぜられた。そして1597～98年には、慶長の役（丁酉倭乱）で朝鮮・明の攻撃を受けた。

江戸時代（1603～1868）の初期は、ちょうど明王朝が1644年に滅び、清王朝が1683年に統一をする交代期にあたっている。そこで江戸幕府は、当初の明商人と交易をしていた情勢から、1635年には鎖国令を出し、さらに1637年の島原の乱のあと、1639年の鎖国令からは中国・オランダ以外の貿易を禁止した。ここに中国との長崎貿易が始まり、生糸・高級絹織物・砂糖・漢方薬・陶磁器などの輸入とともに、漢籍も商品の一つとして日本にもたらされている。この時代は日中交渉がさかんで、書籍による新学問や知識が導入された。ここでは、歴史書と『史記』にかかわる概略をみておこう。

漢籍輸入の手順

大庭脩氏は、中国から輸入された書籍を知る資料を、以下のように分類されている。《第一次資料》は、長崎貿易の時の資料で、これらの資料は少ないが具体的な唐船の積荷を知ることができる。

- 1 齋来書目（中国船の報告、書物改め）
- 2 大意書（書物改めの内容説明）
- 3 書籍元帳（書籍のリスト）
- 4 直組帳（値段表）
- 5 見帳（見込みの値段）、落札帳
- 6 『唐蛮貨物帳』

つぎに《第二次資料》は編纂物で、1）長崎書物改役、向井富の『商舶載来書物』、2）『舶載書目』（長崎奉行、中川忠英の著か）、3）尾崎雅嘉の『舶来書目』がある。このうち『舶載書目』に記された正徳元年（1711）の卯五十一番船の貨物では、合計86種、1100冊以上の書物があり、経書・史書・諸子などの書籍がみえる。

易経講意去疑二卷六冊，……集古印譜六卷六冊，……江南通志七十六卷二十六冊，……戦国策十卷四冊，……易解十卷五冊，詩経疑問八卷六冊，……文選六臣注六十卷三十二冊，……歴代史纂左編百四十二卷百冊，史記百三十卷二十冊，歴朝綱鑑全史七十卷三十冊，……四書大全二十八卷二十四冊，……本草綱目五十二卷四十冊，……西湖遊覧志五十卷十六冊，……左伝文定十二卷八冊，……三国志六十五卷二十四本，合刻管子韓非十冊，泊如斎重修宣和博古図三十二卷二十一冊，内経素問十卷八冊……

この中には、「史記百三十卷二十冊」がみえる。また「戦国策十卷四冊」とは、明万暦9年（1581）の宋鮑彪注，元呉師道重校の版本，あるいはこれに諸家の評語を加えた『戦国策譚概』10巻の版本であろう。前漢末に劉向が編纂した『戦国策』は、『史記』戦国部分の先行資料とも関連するが，北宋時代に33巻のうち12巻が散佚し，曾鞏（1019～1083）が33巻本に復元したという経過がある。その後，南宋時代に姚宏本33巻と鮑彪本10巻が刊行され，さらに元代に呉師道が校訂した『戦国策校注』鮑本10巻が刊行された。そして明清時代の版本には，以下のようなものがある。

- ①『鮑氏国策』10巻：明嘉靖7年，1528版本，宋鮑彪注
- ②『戦国策』10巻：明万暦9年，1581版本，宋鮑彪注，元呉師道重校
- ③『戦国策譚概』10巻附1巻：明万暦15年，1587版本，②に諸家評語を加える
- ④『戦国策』33巻：清乾隆21年，1756版本，宋姚宏校正，盧見曾刻雅雨堂叢書本
- ⑤『戦国策』33巻：清嘉慶8年，1803版本，漢高誘注，宋姚宏校正，清黃丕烈撰

したがって明代までの『戦国策』版本は，鮑本・姚本の二系統のうち鮑本が主流で，「戦国策十卷四冊」とは，名称と巻数からすれば②か③の鮑本とおもわれる。

また大庭氏は，《第三次資料》の関連資料として，1）『華夷変態』，2）『唐通事会所日録』，3）『幕府書物方日記』をあげられる。とくに『書物方日記』

は、将軍の蔵書となった紅葉山文庫の書物奉行の日誌である。これらによって江戸幕府や諸国の大名・商人などに、漢籍がもたらされる背景をうかがうことができるといわれる。

幕府・大名と漢籍収集

江戸時代の蔵書には、まず幕府の書庫がある。徳川家康は、慶長7年(1601)6月、江戸城南の富士見亭に文庫を建て、金沢文庫などの蔵書を収容した。この頃のエピソードとして、池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」(二松大学雑誌『二松』2, 1932年)では、『板倉卜斎覚書』の一節を紹介している。

家康公書籍を好せられ、南禅寺三長老、東福寺哲長老、外記局郎、水無瀬中納言、妙寿院学校兌長老など、常に被_レ成_二御咄_一候故、学問御好、殊之外文学御鍛錬と心得、不案内にて詩歌の會の儀式有と承り候、根本詩作・歌・連歌は御嫌ひにて、論語・中庸・史記・漢書・六韜・三略・貞観政要、和本は延喜式・東鑑也、其外色々、大明にては高祖寛仁大度を御褒め、唐の太宗・魏徴を御褒め、張良・韓信・太公望・文王・武王・周公、日本にては頼朝を常々御咄被_レ成候。

池田氏は、このように徳川家康が多くの周漢の人物を列举するのは、平素から『史記』を愛読していたのであろうと想定している。

この書庫は、のち寛永16年(1639)に紅葉山文庫とし、長崎に輸入された唐本を選んで納めたという。この書庫に勤務した書物奉行の日誌が『幕府書物方日記』であり、大庭脩氏は、残された資料から徳川吉宗の時代に大量の漢籍が購入されることを指摘している。

このほか尾張徳川氏の蓬左文庫(名古屋市)や、加賀前田氏の尊経閣文庫などが残されており、当時の漢籍収集の様子がわかる。

5 漢籍と和刻本『史記』の刊行

江戸時代の『史記』諸版本については、すでに池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」と、池田英雄「著作より見たる本邦先哲の史記研究」(1984年)に説明がある。この和刻本『史記』の刊行は、テキストが入手しやすくなるとともに、のちに考証・研究の進展をうながす効果があった。

『史記』『戦国策』の和刻本

最初に刊行されたのは、木活字を用いた版本である。『慶長古活字本史記』三種は、『史記』全巻に三注を摘録した大形本で、第一種は「有界、八行本」、第二種は「無界、八行本」、第三種は「無界、九行本」で、内容は同じという。これは京都の角倉素庵が、木活字を用いて刊行したといわれ、川瀬一馬氏は、第一種の刊行年を慶長11年(1606)以前と推定している。また『史記』のテキストではないが、寛永3年(1626)には、陰山の玄佐が『史記桃源抄』を刊行した。

つぎに江戸時代で刊行されたのは、八尾版・紅屋版に代表される和刻本『史記評林』である。これらは以下の版がある。ただし、これは明・凌稚隆の輯校した『史記評林』ではなく、李光縉の「増補」本の翻刻である(戸川芳郎「景刊『懷徳堂文庫本・史記雕題』について」『汲古』23, 1993年)。

『史記評林』八尾版：寛永13年(1636) 京都・八尾助左右衛門

『史記評林』八尾版：寛文12年(1672) 京都・八尾甚四郎友春

『史記評林』八尾版：天明6年(1786) 寛文12年本の復刻

『史記評林』紅屋版：寛文13年(1673) 京都

『史記評林』紅屋版：明和7年(1770) 京都、寛文13年本の再刻

池田英雄氏は、八尾版・紅屋版の和刻本『史記』が、(1)テキストの入手を容易にし、(2)全巻に訓点をほどこしたことによって、文意の理解が容易になったことを評価している。このほか寛政4年(1792)、5年(1793)には

『史記正文』の諸本が刊行され、本文だけ読む方法も行われたが、注釈を合わせた和刻本『史記評林』の刊行は、明治時代までつづいている。

これに関連して、和刻本『戦国策』の刊行をみておこう。すでに『戦国策』は宋代に再編集され、明代では鮑本系統が主体であった。江戸時代の版本は、諸家の注釈を集めた『戦国策譚概』が和刻本のテキストとなっており、注釈を多く集めた『史記』評林本と同じ傾向をもつといえよう。その刊行は『史記』より遅れ、以下のような版本がある。

『戦国策譚概』10巻付録1巻：寛保元年平安書林吉田四郎右衛門等刊本，1741
→大阪大学文学部・懷徳堂文庫ほか多くの版本が現存する

『戦国策譚概』10巻付録1巻：大阪河内屋茂兵衛等刊本

『戦国策譚概』10巻付録1巻：天保3年京都田中専助刊本，1832

『国策異同考』1巻1冊，日本福家大有撰，宝暦14年刊本，1764
(関西大学・泊園文庫)

官版・藩校の漢籍

近世の漢籍受容をうけて、これまで朝廷・幕府から武家・寺院と私人による出版事業が始められたが、和刻本『史記』の刊行も、その歴史の一齣であるといえることができる。江戸幕府では、家康につづいて、綱吉・吉宗の時代に積極的な出版事業が行われ、やがて昌平校や諸藩で漢籍が出版された。この間の事情は、笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館，1962年）に詳しい。このうち、歴史書にかかわる点を見ておこう。

笠井氏の説明によると、徳川綱吉は湯島に聖堂を設けて、経書を出版し、8代の吉宗は、享保6年（1721）以降に『六論衍義』、医療書、民政書などを出版した。そして11代の家斉は、湯島聖堂を改めた昌平坂学問所を幕府の官学として確立させ、昌平校で出版を行った。その数は、寛政11年（1799）～慶応3年（1867）までの69年間に、200余種、1000冊以上の官版漢籍を刊行したという。

これに対して諸藩でも、藩校を設置したあとは、諸書の編集・出版を藩校で

行った。ただし水戸藩では、水戸光圀が『史記』伯夷列伝に感激して、修史をするため駒込の下屋敷に史館を設け、『大日本史』の編纂を始め、寛文12年(1672)に小石川の藩邸で彰考館と称した。ここに朱舜水や多くの学者を招いて、『大日本史』248巻の編纂などを行った。これらの藩校は、江戸時代の吉宗ころからの実学的傾向をうけ、享保・宝暦期をへて、天明・寛政期は治世に役立つ学問を重んじ、これ以降に増加したといわれる。

そのとき幕府や諸藩では朱子学を重んじ、昌平校では歴史教科書として、『春秋左氏伝』(左伝)、『国語』『史記』『前漢書』『後漢書』『資治通鑑』などを用い、諸藩校の多くはこれに準じた。たとえば会津藩日新館では、『左伝』『史記』『漢書』『後漢書』『十八史略』『蒙求』を基本課程とし、米沢藩興譲館では、8歳から経書の素読をし、12, 13歳で『左伝』, 14, 15歳で『史記』, 16歳で『漢書』, 17, 18歳で『資治通鑑』及び綱目, 19歳で『通鑑易知録』を履修するものであった。しかし荻生徂徠が主唱した古文辞学は、後述のように歴史を重んじ、それを奉じた荘内藩致道館の教程では、まず『左伝』『国語』『戦国策』『史記』『西漢書』を修めたのち、六経に入るのが本道であったことを指摘している。

いま諸藩で刊行された歴史関係の書物には、一部に以下のようなものがある。

越後村上藩：『史記』25冊，寛政4年，1792

小田原藩：『史記論文』130巻，25冊

鶴牧藩：『増訂史記評林』50冊，明治2年，1869

郡山藩：『晋書』52冊，『宋書』45冊，『南齊書』21冊，『梁書』15冊，
『陳書』10冊。(志村楨幹，荻生徂徠等校)

松江藩：『南史』16冊，『北史』24冊

姫路藩：『宋明道本国語』21巻附6巻，合8冊。『戦国策考註』6巻，6冊

守山藩：『戦国策考註』8巻，6冊，戸崎允明撰，安永6年，1777

これらは古活字本や和刻本の刊行と合わせて、テキストの普及を示すとともに、江戸時代の儒家などの問題関心が広まり、その中で『史記』注釈・研究が盛んになることに対応している。

6 荻生徂徠とその学派

荻生徂徠の史学観

江戸時代に中国から漢籍がもたらされ、また和刻本『史記』が刊行されたが、それらはどのように読まれ普及してゆくのであろうか。その一例として、吉宗時代の荻生徂徠とその弟子の学問に注目してみよう。

荻生徂徠（1665～1728）は、はじめ朱子学を学び、のち古文辞学を修めたが、歴史学に対する言及がある。すなわち『経子史要覧』史要覧・総論（島田虔次編輯『荻生徂徠全集1』みすず書房、1973年）では、編年・紀伝体と正史・『資治通鑑』などを説明しながら、古に通じるため歴史学をすすめ、つぎのように述べている。

歴史は、『左伝』『国語』『史記』『前漢書』この四部によくよく熟すべし。

それよりして六経も自らすゝめて行くべし。……（二十一史）この書をことごとく熟習するには、只史・漢の二部を、よくよく習練すべし。

ここで徂徠は、経書を学ぶためにも歴史学の必要を説き、とくに『史記』『漢書』の学習を勧めている。

史要覧では、さらに『左伝』『国語』の評価につづいて、『史記』『漢書』の解説をする。そして『史記』の項目では、古を知るには秦漢の制度を知る必要があり、まず八書を熟読し、それから本紀・世家・列伝と読みすすめるべきという。そして五帝や殷周本紀は、書経と比べて読み、世家は『戦国策』と比較することを述べる。

『戦国策』は、左氏伝の後篇にして『史記』の本書なり。故に『戦国策』をよくよく熟習して『史記』を読むときは、殊に易易として、むつかしからず。それより他の古書、韓嬰が内伝・外伝、劉向が新序・説苑、西京雜記、さては国語・家語・呂氏春秋、晏子春秋、管子、墨子、さては莊子、列子の類、淮南・韓非、孔叢の書籍を、ぼつぼつと読みゆけば、彼にて是がわかり、此にて彼がわかりて、『史記』『漢書』とて、むつかしきものに

ては、さらさらなし。

『漢書』の項目でも、「其看法、史記と同じ。これを前の諸書に引き合わせて考え見るべし」といい、また歴史学の必要を説いている。ここから『史記』『漢書』の学習は、経書や『戦国策』『新序』『説苑』『呂氏春秋』、諸子の読書と研究につながることになる。これを実行したのが、太宰春台をはじめ徂徠学派の人々である。

徂徠学派の『史記』『戦国策』研究

荻生徂徠は、歴史を学ぶために『左伝』『国語』『史記』『漢書』の学習を説いたが、具体的に『史記』の読法や研究のあとを知る手がかりは少ない。しかし『史記』を学ぶために参照すべきとした『戦国策』に関連して、その学習法の一部がうかがえる。

太宰春台（1680～1747、尾藤正英「太宰春台の人と思想」『徂徠学派』日本思想体系37、岩波書店）は、服部南郭（1682～1759）とともに徂徠の弟子であったが、その春台のもとで『戦国策』を会読した様子が記されている。それは服部南郭に師事した湯浅常山（元楨、1707～1781）の随筆『文会雑記』である。

『文会雑記』（『日本随筆体成』第1期14、吉川弘文館、1975年）巻之一上では、『戦国策』の講読をつぎのように記している。

- ・国策ヲ春台ノ方ニテ会アリシ時、甚ダヨミニクキ物ユエ、コレハ遊説ノ云マワリタルコトナレバ、トカクロニテ云テ見タルガヨキトテ、会読ニメイッ本文ノ通ヲ、今日ノ口上ニテ云テミタルト也。ソレユヘスム処、スマヌ処、ハキトワカレタルト也。……
- ・南郭云、国策ハヨミニクキ書ナレドモ、遊説ノ手アヒ、イツモ同ジダマシカタト心得レバ読メルナリ。又ヲトシ咄ニシカケテ、人ヲタラスト心得レバ、合点ユキ易シトナリ。

ここでは春台のもとで、『戦国策』を当時の言葉に翻訳しながら、実際に発言して理解したことがうかがえる。また『文会雑記』巻之一下では、荻生徂徠が『戦国策』の善本を持っていたことや、春台の漢籍注釈・校訂の仕方を述べ

ている。

- ・国策ノ本色々アリ。今ノ刊本ノ目錄ハ本書トハ違アリ。徂徠ノ方ニアリシ本至テヨシトナリ。元禎ガモチタル本ハ文徴明（明人1470～1559）ノ手本ナリト云本ナリ。同ジ本ヲ子才所持セラレタリ、ト（松崎）君修ノ話ナリ。
- ・子亮ノ方ニテ、春台所持ノ杜林合注ヲ見ル。至極念入テ直サレタリ。ゴフンニテ一点一画ノ訛マデ直シ、青墨ニテ人名ニ一ヲナシ、朱ニテ句読、注ハ青墨ニテ書キ込アリ。春台ノ製セラレタル青墨也。見事ナリ。

つまり春台は、自分の所持する『戦国策』に、胡粉で字画を白く塗りつぶして字句の校訂をし、人名には青墨の傍線を引き、句読は朱色で、書き込みの注釈は青墨で記している。それは『史記』『漢書』など他の諸本でも同様であったらしい。

- ・春台ハ書ヲ校スルゴトキハ、キワメテ精密ナリ。史・漢・左伝ノ類、悉和読要領ノ通りノ点ニ直サレタリ。皆ゴフンニテヌリケシテアリ。一画ノチガヒ、片カナノ一画マデモ改正サレタルト也。是ハ会業ニテ読書甚クワシクナリタルトナリ。君修ノ話ナリ。（卷之一上）
- ・君則云、春台ハ輟耕録マデ白スミノ塗抹シテアリ。所蔵ノ本ハ悉皆然リ。門人云、先生モカヤウニシタマウハ、愚ナルニ近キコトナリト、ヒソカニ云アヘリトナリ。スベテヒヤウシヲ仕替へ、点ヲ直シ、字ヲ改、嚴密精正及ブベキヤウナシトナリ。（卷之二上）

また注については、「班馬異同ハ春台見ラレタル由、君修ノ話ナリ。（卷之一下）」といい、『史記』の諸本・内容にふれた記述もある。辞書は、字彙、玉篇などを参照している。

- ・春台ハ殊ノ外ニ字音ヲタバサレタリ。字彙、玉篇、韻会ヲ以テセラレタリ。其内字彙ハ字ヲ尋ルニヨシト云ヘリ、ト君修ノ話ナリ。元禎云、徂翁ノモタレタル四部稿ノ内、一冊チラト見タルニ、上ニ書込ミアリ。正字通ヲ専ラ引レタリ。（卷之一上）
- ・春台ハ殊ノ外ニ、字彙ヲ嗜好アリテ、何モ字彙ニテ正サレタリ。ヒタト字彙ヲ出シテ、音ヲタバサレタリ。韻学ハ殊ニクワシカリシト也。

(巻之一上)

これらを見ると徂徠学派の人々は、徂徠の教えを守って『史記』『戦国策』などの漢籍を講読している。その方法は、まず自分のテキストを校訂し、字句の異同を注記している。つぎに句読をほどこして、内容を理解しながら講読し、上に字音・意義に関する書き入れを行っている。これらは江戸中期の漢学者の『史記』研究のあり方を示唆しており、つぎの注釈・研究につながるものである。

7 江戸時代の注釈と研究

『史記』『戦国策』の注釈・研究

江戸時代の『史記』注釈・研究は、池田英雄「著作より見たる本邦先哲の史記研究」で整理され、池田四郎次郎著・池田英雄校訂増補『史記研究書目解題稿本』(1978年)には、その解題を記している。以下に、主なものをあげておこう。

- 1) 岡白駒(号龍洲)『史記鱗』10巻(宝暦6年, 1756)。早い時期の注釈。
- 2) 清田絢(号澹史, 1785没)『史記律』。
- 3) 重野葆光(字子潤, 1792没)『史記節解』7巻。
- 4) 恩田維周(1813没)『史記辨疑』2巻, 『史記辨誤』1巻。
- 5) 中井積徳(履軒, 1732~1817)『史記雕題』。最も著名な注釈。
- 6) 古賀煜『史記匡謬』(文政8年, 1825)。『左伝』との校訂。
- 7) 村井元融(1852没)『読史記』。
- 8) 羽倉九(号蘭堂, 1862没)『読史記笥記』。

また字句の校勘・文法には、以下の研究がある。

- 1) 皆川愿(号淇園)『太史公助字法』2巻(宝暦10年, 1760)。
同『史記戾柁』3巻。
- 2) 菊池武矩『史記文訣』1巻(寛政11年, 1799)。
- 3) 大島忠蔵(号贅川, 1838没)『博士家本史記異字』3巻。

4) 大島忠蔵, 大島桃年 (号藍涯, 1853没)『史記攷異』14冊。

5) 岡本保孝 (号況斎, 1878没)『史記伝本考』, 『史記』の版本を図示。

同『影抄史記索隠校訂凡例』『史記考文』十二本紀の宋・元版の文字異同。

このうち大島父子の『博士家本史記異字』と『史記攷異』は、文字の校勘で高く評価されている。たとえば滝川亀太郎『史記会注考証』では、『博士家本史記異字』を大島忠蔵の手録と推測し、楓山本・三條本・中彭本・南化本・中韓本を引いて、今本と校訂したと述べている。また『史記攷異』は、20余種の版本と文字の異同を校勘したもので、大島利一「大島賛川・桃年父子の史記考異について」(『東洋史研究』4-3, 1939年)の考察がある。

これに対して『戦国策』の注釈・研究は、以下の例がある。

1) 戸崎淡園 (允明, 哲夫, 1728～文化3年1806, 享年78才, 常陸の人)

『戦国策通考』8巻付録1巻, 5冊 (安永6年, 1777刊行)

2) 関修齡 (松窓, 君長, 1725～享和元年1801, 享年76才, 昌平黌)

『戦国策高注補正』9巻6冊 (寛政8年, 1796自序)

3) 中井履軒『戦国策雕題』8巻 (近藤南州手校手織本), 大阪天満宮御文庫

寺門日出男「大阪天満宮御文庫本『戦国策雕題』について」(『懷徳』61, 1991年)

4) 横田惟孝 (乾山, 1773～文政12年1829, 享年56才, 武蔵)

『戦国策正解』10巻 (文政7年1824自序, 12年刊本1829, 鮑注呉校本を底本)

5) 安井息軒 (衡, 1798～明治9年1876, 享年78才)

『戦国策補正』2巻2冊, 姚本を底本

このうち漢文体系本『戦国策正解』は、『戦国策雕題』『戦国策補正』を入れている。

以上の『史記』『戦国策』の注釈・研究をみると、和刻本への書き込み形式は、江戸時代に類似した方法のようである。しかし和刻本には、字句の誤りがあるため、校訂なくしては研究できない。そこで本文校訂から字句注釈、史実の解釈へと展開しており、ここに江戸期の考証学の様子がうかがえる。したがっ

て漢籍の校訂・考証については、邦儒の研究を再評価すべき点がある。その一例として、中井履軒『史記雕題』の特徴をみておこう。

中井履軒『史記雕題』

中井積徳（履軒、1732～文化14年1817、享年86才）は、大阪学問所「懷徳堂」の学者である。その著書に、『史記雕題』『戦国策雕題』などがある。

『史記雕題』は、滝川亀太郎『史記会注考証』と池田四郎次郎『史記補注』に引用され、両者から高い評価を与えられているが、その引用は履軒の自筆本ではなく、弟子によって抄写されたものである。しかし大阪大学懷徳堂文庫復刻刊行会監修『懷徳堂文庫本・史記雕題』上・中・下（吉川弘文館、1991、92、93年）の刊行によって、当初の形態が明らかになった。その復刻は、注釈のある部分の写真を掲載し、読みにくい箇所については下巻に一括して翻刻している。

この自筆本によると、①京都の八尾再刻版『増補史記評林』の和刻本50冊を、書き込みができるように29冊に綴じ直してテキストとしている。②に、『史記評林』序文・付録類を「削柿上巻」とし、また「三皇本紀」と後世の竄入部分を想定して「削柿下巻」として、合わせて2冊分を本文と区別する。戸川芳郎氏は、『史記』本来の姿を蘇らせる意識が背後にあるというが、寺門日出男氏の解題は、履軒が「日者列伝は当に削るべきであるが、文辞を惜しんで残す」と述べることから、文章の手本をなるものを残し、『史記』の優れた文学性に注目したのではないかとする。ともかく③に、このテキストの欄外に注をほどこすという形式をとっている。そして第二次に書写したとき、『史記雕題』と名付けられたらしい。ただし影印された『史記雕題』をみると、実際には『史記評林』の上部空白に注を書いたり、余白がない時には欄の上部や、欄外の左右余白に書き込んでいる。

その内容と特色は、呂后本紀を例とすれば、字句の異同等の短文から、人物・歴史評価にかかわる33カ所の注釈がある。

1) 先人の注釈の当否を論じる（顔師古、臣瓚、文穎など）。

- 2) 字句の校訂に関するもの(衍字、同義語、削るべき字句など)。
- 3) 年代の考証。
- 4) 文意を理解しようとするもの。
- 5) 制度・称号・暦法などの考証。
- 6) 巻末の人物評価、歴史評価。高祖と戚夫人を非とする。

この段階では、従来の注釈の伝統を受け継ぐもので、あるテーマによって項目を立てたりする、いわば筭記の形式になっていない。しかし、その考証は文章方面だけでなく、当時の社会や人物を理解しようとする独自の見解が見られる。後に、『史記会注考証』と『史記補注』に引かれるのは、とくに1)～5)の部分の考証である。そして寺門日出男氏によれば、『史記会注考証』は東北大学附属図書館にある旧狩野享吉氏所蔵の『史記雕題』写本で、『史記補注』は池田四郎次郎氏が所有の写本によるという。

医学・天文分野の研究

江戸時代では、実学の勃興に応じて『史記』八書の律・暦・天官3書や、医学関連の列伝の研究がある。池田英雄氏によれば、天文・暦と医学関係の研究には以下の著作があり、とくに医学部門で実学としての研究は、中国にみられない日本独自の傾向といわれる。

- 1) 西村遠里『史記天官書図解補注』1巻(宝暦4年、1754序、未刊)
同『史記律暦補注』1巻(未刊)
- 2) 森效『史記暦書解』1巻(宝暦11年、1761序、未刊)
同『史記暦書甲子篇』1巻(宝暦11年、1761序、未刊)
- 3) 松永億蔵『史記律書考』(安永4年、1775序、未刊)
同『史記律書補注』1巻(安永8年、1779序、未刊)
同『史記暦書補注』1巻(安永8年、1779序、未刊)
- 4) 猪飼彦博『太史公律暦天官三書管窺』3巻(天保10年、1839)
- 5) 池永淵『史記律暦書解』2巻(嘉永5年、1850)

また扁鵲倉公列伝には、以下の研究がある。

- 1) 安藤惟寅著、安藤正路補考『扁鵲伝割解』1巻(明和7年, 1770)
- 2) 邨井杵『扁鵲伝解』1巻(安永6年, 1777, 未刊)
同『扁鵲伝考』1巻(1777, 未刊)
- 3) 池原雲堂『扁鵲倉公伝』1巻(天明6年, 1786)
- 4) 菅井倉常『扁鵲伝注』1巻(天明7年, 1787)
- 5) 猪飼彦博『読扁鵲伝割解』1巻(文化3年, 1806, 未刊)
- 6) 中莖謙『扁鵲伝正解』1巻, 附陰陽論1巻(文政6年, 1823)
- 7) 石坂宗哲『扁鵲伝解』1巻(天保3年, 1832)
- 8) 堀川濟『影宋本扁鵲倉公伝考異』1巻(嘉永2年, 1849)
同『扁鵲伝備参』1巻(1849)
- 9) 丹波元堅『影宋本扁鵲倉公伝』1巻(1849)
- 10) 丹波元簡著, 元胤補, 元堅附案『扁鵲倉公伝彙考』2巻(1849)
- 11) 伊藤馨『扁鵲伝問難』(嘉永3年, 1850, 未刊)

日本史学への影響

先に水戸藩の『大日本史』の編纂が、『史記』の影響を受けている例をみたが、このほか頼山陽の『日本外史』にも、その影響が指摘されている。たとえば武藤長平「史記と外史」(『東亜研究』2-5, 1912年)は、『史記』伯夷列伝と『日本外史』の新田義貞の記述を比べて、そこに「善惡応報」の思想と「勸善懲惡」主義が共通するという。その評価はともかく、頼山陽が『史記』を意識したことが知られている。

池田二郎次郎氏は、『史記』の評論に優れた人物として、頼山陽と森田節斎の二人をあげている。池田氏によると、とくに頼山陽に專論はないが、古文典刑の凡例で理解することができ、項羽本紀の「鴻門の会」の一段を名文として広めたのは、かれの影響という。また森田節斎(1868没)『史記序賛蠡測』は、論賛を評論したもので、「山陽は叙事を取り、節斎は論賛を取った。各自見る所を異にするも、史記の文の妙処は結局、叙論両者にある」と説明している。

お わ り に

鎌倉・室町、江戸時代の『史記』受容をみると、この時期には『史記』テキストの変化があった。それは平安時代の紙写本から、鎌倉・室町時代は『史記』の版本が入り始め、その抄写による書き入れが加わっている。また江戸時代には、和刻本『史記』が刊行され、さらにテキストが民間に普及した。このような情勢をうけて、室町時代には『史記桃源抄』のような優れた注釈があらわれ、江戸時代には『史記』の校訂や考証が進むようになった。これは、その後の『史記』研究の基礎となるもので、書誌学的な考察がある。

日本の『史記』研究では、こうした受容史をふまえ、明治以降にどのような展開をしてきたかが、つぎの課題となる。これについては、あらためて考えてみたい。

主要参考文献

- 1 滝川亀太郎『史記会注考証』史記総論（史記流伝、史記鈔本刊本）
- 2 水澤利忠『史記会注考証校補』八、九「史記之文献学的研究」（1961、1970年）
- 3 池田四郎次郎著・池田英雄校訂増補『史記研究書目解題稿本』（明德出版社、1978年）
- 4 池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」（二松大学雑誌『二松』2、1932年）
- 5 池田英雄「著作より見たる本邦先哲の史記研究—古今伝承1300年間の消長」（『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』所収、1984年）
- 6 池田英雄「日・中各時代に於ける《史記》受容のあり方を検証す」（『栗原圭介博士頌寿記念東洋学論集』所収、1995年）
- 7 藤田勝久「日本の『史記』研究」（『愛媛大学法文学部論集』人文学科編7、1999年）
- 8 藤田勝久「『史記』の日本伝来と受容」（同上、人文学科編9、2000年）
- 9 覃啓勲『《史記》与日本文化』（武漢大学出版社、1989年）

- 10張新科・龔樟華『史記研究史略』附録；日本《史記》研究概述（三秦出版社，1990年）
- 11嚴紹璁『漢籍在日本的流布研究』（江蘇古籍出版社，1992年）
- 12水田紀久・頼惟勤編『中国文化叢書 9 日本漢学』（大修館書店，1968年）
- 13斯文会編『日本漢学年表』（大修館書店，1977年）
- 14大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎出版，1984年）
- 15大庭脩・王勇編『日中文化交流史叢書 9 典籍』（大修館書店，1996年）
 - * 大庭脩「日本における中国典籍の伝播と影響」
 - * 大庭脩「江戸時代の中国典籍交流」
- 16大庭脩『漢籍輸入の文化史－聖徳太子から吉宗へ』（研文出版，1997年）
- 17山岸徳平『近世漢文学史』（汲古書院，1987年）
 - 序章；総論，第五章「古文辞学（復古学）」，第七章「古注学」